

〔展評〕

## 春陽会第十回展

## 春陽会を見る (上) 目立った明るい空気

川島理一郎

川島理一郎(かわしまりいちろう 一八八六・明治十六年〇  
一九七一・昭和四十六年) 栃木県足利市に生まれる。

一九〇五年渡米、ワシントンのコロラン美術学校に入学。一  
九一一年渡仏、パリのアカデミー・ジュリアン、その後アカデ  
ミー・コロロツシに学ぶ。サロン・ドートンヌに入選。フォー  
ヴィスム、キュビスムの新運動から刺激を受け、パブロ・ピカ  
ソ、藤田嗣治などと交友を結ぶ。スペイン、アフリカ・モロッ  
コへの旅を経てアメリカを経由し一九一九年に帰国。一九二  
〇年に再渡仏。一九二四年にも再々渡欧。一九二六年梅原龍三  
郎等と国画創作協会第二部(後国画会)を創設。一九三五年同  
会脱会。一九三六年女子美術学校の教授に就任。文展の審査員  
を依頼される。戦中従軍画家として中国大陸に従軍。戦後日本  
芸術院第一部会員となる。日展運営会理事、日展理事、日展顧  
問を歴任する。

作家の立場にある者が、完全な批評をするといふ事は、なか／＼至難な事  
である。随つて私は積極的に批評する事を避けてゐたが、本紙からは是非にと  
いふ注文で、余儀なく筆を執る事になつた。作家の批評といふものは、その  
立場から必然的に偏同し易いもので、屢々<sup>しばしば</sup>一面的だといふそしり

を批評家側から受けてゐるのは、私としても其の欠陥を肯定しなければな  
らない。さういふ意味からすれば、私のこの春陽会評も亦一面的になり易い  
危険を有するもので、厳密な意味の批評とはならない。ただ作家としての立  
場から観る場合、そこに武士は相見互ひといふ風な理解があつて、その理解  
に出発して、幾分でも相互の爲めになる事となれば結構だと私は思つてゐ  
る。

◇

昨年の春陽会は、折悪しく私が渡仏の際で、出発前さうこうとして一巡し  
ただけであるから、本年の成果を昨年と厳密に対比する事の出来ないのは  
遺憾であるが、大たいに於いて本年の春陽会は、一般的には大分明るい空気  
を持つて来たやうである。この明るさは、春陽会の作品の中に、いちけた日  
本主義的なものや郷土的なものが少なくなつて、矢張り近代仏蘭西の明朗  
性ともいふやうなものの感化が次第に拡大されて来たからだと思ふ。こ  
の点からして、春陽会の中には、フランスのネオ・クラシズムの影響が多分  
に浸透して来てゐるやうである。

一方又技術の方面から観ると、ずば抜けて優れたものは見当たらないが、素  
描的基礎の薄弱な作品が次第に影をひそめ、造形的な条件を整備した作品  
が比較的多く現はれて来たので、技術の一般水準が昨年よりも高くなつて  
ゐると思ふ。この技術の水準が一般的に高まつて来たといふ事は、勿論結構  
な事であるが、一面この水準を抜いて新たに問題となるやうな事は淋しい  
事である。

最近在野の美術集団を帝展に合流せしめては、といふやうな希望がある  
と聞いてゐるが、この希望がやがて実現されるやうな気運に向ふとしたな  
らば、愈々吾々在野集団は其の真価を慎重に考慮せねばならぬわけである。  
春陽会も此の機に於て一つの落付きから立ち直つて多くの問題を画壇に投  
ずるやうな新しい気運に向ふ事は特に切望して止まないものである。

(昭和七年四月二十八日付)

### 春陽会第十回展も

### 春陽会を見る (中) 注目される水谷氏の作

川島理一郎

さて、個々の作品について言ふと、第一室の中では、安宅虎雄氏の《寺と花》以下の六作が注目されるが、安宅氏の作品は明らかにマチスの影響下にある事は否めない。然し全体に色の階調に乏しい憾みがあり、対象の把握が幾分表面的である事は、此種の構成には相当大きな欠陥となつてゐる。

第二室に入ると、青山義雄氏の《裸婦習作》以下の諸作が最も魅力を持つてゐるが、青山氏の絵の具の使ひ方には独特のよさがあり、且つ色の階調も芸術的雰囲気を持つて居て、ユニークな存在を示してはゐるが、氏のデッサンには少なからぬ無理があり、此無理が氏の作品の安定を缺く因由をなしてゐるやうだ。

第三室の水谷清氏の作品は、色面構成が不確かな事と、画面がさばがしい事とが、是等の作品の構成上の効果を余程減殺してゐると思ふ。中で《セビラのカルナバル》が、氏の作品中、最もすぐれてゐる。小山敬三氏の《海濱祭日》は、相当の力作であり、努力の跡も窺へるが、惜しい事には、人物の動きを捉らへてゐない。これは、単なる写真に終始してゐるからではなからうか。又構成的な方面から言ふと、御輿を担ぐ人物と、画面右端の少女との

関連が、有機的に結びつけられてゐないために、画面にのびやかさが失はれてゐる。個人の嗜好からすれば《京の舞妓》の方が、遙かに芸術的な感興を感じる事が出来る。同じ室にある鬼頭養二郎氏の《長島風景》や《松樹と麥丘》の二作は、氏独自の青い色調が、一つの特色を持つてゐるが、この青い色調から来る冷たい感じはいかんともし難い。



小山敬三 《海濱祭日》



第四室では、林倭衛氏の《或る詩人の像》が注目すべきものだと思ふ。此作品は、林氏の持味がよく出て居るし、又、全体が如何にも自然に、楽々と出来上つてゐて、色も美しい。長谷川昇氏の《S嬢》は、まことに長谷川氏

らしい絵であるが、此作品には、従来の長谷川氏のよさがいたく失はれてゐるのが惜しまれる。小林徳三郎氏の《髪を梳く少女》以下一連の作品は、身辺の生活描写とも見られるもので、かういふ意図には好意を寄せる事が出来るが、氏のぎこちなさと、画面の平板さとが、是等の作品に親しみ難い雰囲気を醸してゐる。然し色合ひの上には氏独自の味はひを持つてゐると思ふ。



山岳描写を専らとする足立源一郎氏は、本年も亦《白馬嶽遠望》以下の山岳風景で第五室の中心となつてゐるが、本年の作品は、既往の山岳描写に比して、その情趣的な要素が著しく失はれ、従つて画面に浸潤の気が乏しい。中でも人事を取り入れた大作《高原散策》は、その画的効果が稍通俗に傾き過ぎた憾みがある。上野春香氏の滞欧諸作は、絵の具の、厚みのある塗り方に、此作者の特異な技術を認める事が出来るが、デッサンの崩れてゐる事が欠点である。山崎省三氏の《冬のノートルダム・ド・バリ》が最もよい効果を持つてゐるやうだ。

(昭和七年四月三十日付)

## 春陽会第十回展

## 春陽会を見る (下) 木村莊八の完成作

川島理一郎

第六室は、日本画室であつて、先づ小杉放庵氏の洗練に洗練された《水郷八景》の毛筆の妙味と、森田恒友氏の《山麓煙霧》の素朴な自然観照に、心を惹かれる。中川一政氏の《閑行帖》の連作には、自然情味が豊に表現されてゐる。畫面の中にはすべてに詩がある。氏の技術は稚拙である。然しこの稚拙が芸術的な感銘を与へるのは氏の诗情によつて救はれてゐるからだと思ふ。

◇

第七室は再び油絵となるが、ここでは岡本一平氏の帰朝土産とも云ふべき《挨拶》の一作を見逃す事が出来ない。このトボケた、一種不可思議な作品は結局ナンセンスに過ぎないとはいへ、此全体的な風格は、単なる画学生品の筆技とは趣が違つてどこか見所のあるのを感じる。石井鶴三氏の諸作では、私は《裸女習作》などの作品よりも却つて《老婦念仏》や《向日葵》などの方が石井氏の才分が自然に流露してゐるやうに思ふ。森田恒友氏の《初冬》はおだやかな、落ちつきのある画面で、大家らしい心構へを画面の中に見出すことが出来る。

第八室に這入ると、中川一政氏の《夜久野》其他の作品が特に目につく。

一政氏らしい特色を持つ画面で、色には生ま<sup>な</sup>のところがあるが、この生まの色がよく物を言つてゐる。山の色の美しい変化が、よく把握されて、それを作りごとにせず自然の儘<sup>まま</sup>に表現してゐるのはよいと思ふ。

◇

第十一室の中心作である木村莊八氏の《牛肉店帳場》は、昨年からの延長で、本年はその完成作が再出品されたのであるが、此画面に描かれてゐる江戸前の女は、木村氏のやうな江戸つ子でなければ、そして、江戸前の女が心から好きものでなければ、とうていあれだけに描き上げる事は出来ないと思ふ。素描的な基礎が確實で、技術に不安のないのが此作品に一種の重厚さを生み出してゐるが、モチーフが明治時代にあるために、現代的な感覚からすれば何んとなく古めかしい感じを免れない。

横堀角次郎氏の作品の中では、《帝大構内》よりも却つて、《顔の習作》や《黄葉》の方に、小味ではあるが、よい効果があると思ふ。

版画の中では、私の好みとしては、前川千帆氏の《山のホテル》、古川龍生氏の《草と昆虫》などが、前者には味の上で、後者には構成の上に、夫々心をひかれるものがあつた。(完)

(昭和七年四月二十九日付)

1932 28, 29, 30 April

昭和7年 第10回春陽展 川島理一郎展評「春陽会を見る」 時事新報 4月28日～30日